

とこのあたりによりるをりにおつるなめり

忘るなよたぶさにつけし蟲の色のあせなば人にいかにこたへむ返し

あせぬとも我ぬりかへむもろこしのるもりもまもるかぎりこそあれ

ぬぐくつのかさなることのかさなればとよめるはめのみをかごとするをりにばきたる

くつのをのづからかさなりてぬぎをかゝなりさてかくはよめる也○中略

私云井もりを守宮といふ様を釋すれば帝皇のあるき給とき宮人の臂にぬるが故に宮をま

もるといへり然ばたゞの人はいかゞすらん

〔瘡囊抄五〕キモリノシルシト云ハ何事ゾ

是和漢共沙汰アル事ナリイモリトハ守宮共書ケリ法華經ニモ侍ベリ其本ノ名ハ蜥蜴也是ノ

血ヲ取テ宮人ノ臂等ニ塗事アリ其蟲取蜥蜴飼以丹砂體盡赤時搗之其血ヲ宮女ノ臂ニ塗ニ何

ニ洗ヒ拭ヘ共更ニ落ル事ナシ然共有姪犯其血則消失スルナリ此ヲ以テ敢テ不調ノ儀ナシ仍

守宮トハ云也サレバ古詩ニモ

臂上守宮何日消 鹿葱花落淚如雨ト云リ鹿葱ハ宜男草也○下略

〔赤染衛門集〕又いひたる

むしのちをつぶして身にはつけすとも恩ひをめぐつる色なたがへそ

かへし

むしならぬ心をだにもつぶさでは何につけてかおもひをむべき

〔夫木和歌抄守宮二十七〕十題百首

ゐもりすむ山下水のあきの色はむすぶてにつくまゝるし也○中略

寂蓮法師

建保四年内裏十首歌合

二條院讚岐